H-1　塩竈市浦戸寒風沢地区　2012年7月25日(水)・8月20日(月)

報告者名	酒井　朋子	被調査者生年	1940年（男）
調査者名	酒井　朋子	被調査者属性	寒風沢区長（H-2話者）
補助調査者	なし		

はじめに

本報告書の内容を提供してくれたのは、2012年より塩竈市浦戸寒風沢地区の区長をつとめている方である。自宅が津波により流出したため、現在は旧浦戸第一小学校跡に建設された仮設住宅に暮らしている。聞き取りは話者自宅の前で1時間ほどにわたっておこなった。またこの報告書には、2012年7月25日に同じ話者に聞き取った内容も含まれている。7月25日は仮設住宅集会所で1時間半ほどにわたって話を聞かせていただいた。

寒風沢の漁業にかかわる今後の課題

寒風沢地区では多くの住民が半農半漁の生活をしている。海苔や牡蠣の養殖が多いが、刺し網漁をおこなう人もいる。寒風沢には5〜6トンの刺し網漁船が6隻あり、これは昨年の津波でもみな無事だった。

いまは壊れた岸壁の修理が課題。平成24年度（2012年度）の予算で漁港のうち158メートルを修理することが決まったが、寒風沢の漁港は全部で800メートルほどもあるため、ごく一部しか修理されないということになる。残りはどうなるのか、まだわからない。桟橋も流れてしまった。だが岸壁に関して言えば、寒風沢は塩竈市の中では早く修復が進んでいるほうかもしれない。

漁港は昭和40年から建設が始められて、数年前に完成したところでの震災だった。

寒風沢地区における津波被害

寒風沢にはもともと76の世帯があった。だが津波のあと、高齢者が塩竈本土の仮設住宅に移ったり、子どもの家に世話になることにしたりして、26世帯が出て行った。だから残りは50世帯になっている。この部落を今後どう維持していくかというのが課題になっている。これまでは部落管理の財源にするためのお金を各世帯から集めていたが、世帯が減ったので財源全体も縮小してしまった。これは祭りの経費にもしていたものだった。

寒風沢のなかでも、とくに「南地区」と呼んでいる地区の住宅がそっくり流されてしまった。40軒以上の家が建っていたが、そのうち7軒しか残らなかった。南地区と北地区をつなぐ部分の平地が少し細くなっていて、そこに南地区のがれきが溜まって波をせき止めた。そのため北地区は津波の勢いを受けずに済み、33軒あった住宅が一軒も流出せずに済んだ。浸水した家はいくつもあったようだけれども。

水際の土地が地盤沈下している。このあたりではみな水路から海水が外に出て行くようになっているのだが、今は土地が低くなったために満潮になると逆に海水が入り込んできてしまう。

今は防災のために土地や道、家屋を高くする（かさ上げする）必要があるという話が出ている。住宅について言えば、かさ上げによって風呂、トイレ、台所などの水回りを新しく作り直す必要が出てきて、そのぶんが各戸の経済的負担となる難しさがある。災害公営住宅を作ろうという計画が進んでいる土地は元々水田なので地盤が安定しないのではという危惧もある。

土地の歴史記憶

津波被害が甚大だった寒風沢の南地区は、昔はにぎやかな場所だった。歴史を見れば開成丸（日本初の洋式軍艦

写真１　渡り廊下のはずされた寒風沢神明社本殿

写真２　六地蔵

として知られる船、1856 年建造着工、寒風沢地区には造艦の碑が建てられている）が作られたのも南側だし、風呂や郵便を請けおうところもあった。現在の屋号の「湯屋」はその港町として栄えていた時代の名残。このあたりには遊郭もあった。寒風沢名物のひとつに「縛り地蔵」と呼ばれる地蔵があるが、これは地蔵にひもがかけられているというもの。その遊郭で働いている女性が、客である船乗りたちが去ってしまわないよう、嵐が来るようにと願をかけて地蔵にひもをかけて縛ったと伝えられている。また高台に上がる途中に六地蔵と呼ばれる地蔵がある。今でもみなお供え物をしている。

今回の津波は南と西、および元屋敷と呼ばれる地域の方向からも来た。2011 年の津波の前、この元屋敷浜ぞいには堤防があった。これはチリ地震のときには盛り土のような形の堤防で、そのときには堤防を乗り越えて波が入ってきた。そのあとコンクリートで堤防が作られたのだが、今回の津波では乗り越えるというより、その堤防が基礎から崩される形で決壊した。元屋敷は今は水田になっているが、この名前から見るとたぶん昔はわれわれの先祖が住んでいたのだろう。

寒風沢の例大祭について

寒風沢では通常、春秋の２回、神明社の例大祭が行われる。御輿渡御のある秋の祭りが大きく、９月の第１日曜日が多い。昨年は春秋ともに中止になったが、今年は開催の方向で一応話が動いている。だが御輿の担ぎ手が不足しているなど、困難はある。震災前も担ぎ手不足の問題はあり、地元から出るのは 4、5 人、残りは塩竈市内から借りてくるような形になっていた。

かつて秋季例大祭は旧暦９月９日におこなっていた。これは新暦の 10 月になるのだが、寒風沢の多くの住民が従事している海苔や牡蠣の収穫とかぶるので、新暦の９月９日になっていた。それが最近、さらに日曜や祝日に移動した。生業にあわせて少しずつ変化してきている。新暦だと残暑がきつく、御輿の担ぎ手がつらいという問題はあるのだが。もともとは米の収穫を機に五穀豊穣を祝う祭りだったのだろう。

祭りは１日で終わることはなく、前夜祭、本祭、引き渡し、と３日くらい続く。宿元（ヤドモト）と言われる 7 世帯が取り仕切り、祭りが終わると次の年の宿元に引き渡す。祭典委員というものもあり、たとえば祭典委員長は区長、副委員長は副区長、というふうに役員とかぶってもいる。重要なのが幹事長で、ごちそうの準備などを取り仕切る。なお、祭りのときには鯛の浜焼きを作る。乾燥させるようにじっくりと大きな鯛を焼いて、大杯に塩をしきつめその上に乗せるというもの。

神明社は塩竈神社の本殿と同じ流造（ながれづくり）。数年前に全部解体して、洗って組み立てて、腐っている部分だけを取り換えるという修復工事をおこなっている。地震で被害があったが、その修復作業は終わった。拝殿と本殿をつなぐ渡り廊下は、ふだんは取り外されており、祭りのときだけつながれる。

祭りをめぐるいちばん大きな問題は、祭道具が倉ごと流れてしまったこと。部落に菊の門の入った古い蔵が１つあって、これは昔江戸時代に献上米を保管しておいた蔵だったのだが。それを祭り道具の保管に使っていた。御輿は神明社に置いておいたので無事だったが、他のものが何もかも流されてしまった。たとえば御輿をかつぐ人などが着る 50 人分の白衣。これは祭りが終わったら洗濯して次年度のために返しておくことになっていて、それで

まとめて倉に入っていたので、一網打尽だった。それから、のぼり旗。本当なら祭りの日には部落の南北のはしと中央にのぼり旗が立って、本当ににぎやかだった。それが無いと、祭りをしたくてもどうにも祭りの雰囲気が出ない。ふだん、のぼりは分散して保管しているのだが、津波の前年は全部一緒に洗って倉に入れておいた。それが災いした。また、7 軒の宿元の 1 つに置いていた御輿飾りの鳳凰が流されたのも大打撃である。神社に置いておけば良かったのだが、スペースがなく……。新しく注文するとなると費用も時間もかかるが、鳳凰なしの御輿は無様な姿になってしまう。鳳凰の胴体は真鍮製。

鈴と麻縄も流れた。小さなもののようだが、そろえようと思うとけっこうな額になる。以前に縄を注文したことがあるが、これが 3 メートルくらいの長さで 14 万円もした。これらの祭り道具をどう再調達するかというのが、目下の課題。